

梅崎春生

現代の文学 5

梅崎春生

昭和四九年八月一六日 第一刷発行

著 者 梅崎春生

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一―二一―二一／郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一(大代表)／振替三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価はカバーに表示してあります

©講談社 昭和四九年／落丁本・乱丁本はお取り替えます

目次

日の果て 5

蜩 42

飢えの季節 54

黄色い日日 74

輪唱 97

Sの背中 108

砂時計 129

庭の眺め

334

仮象

341

幻化

367

卷末作家論／後藤明生

443

年譜

453

装幀／横山明・依岡昭三 卷頭写真／本社写真部

梅崎春生

日の果て

暁方、部隊長室から呼びに来た。登音が階段を登り網扉を叩く前に、落葉の径を踏んで来る靴の気配で、彼は既に浅い眠りから浮上るようにして覚めていた。当番兵の佐伯の声である。網扉のむこうで薄動く影が動くのが見えたが、すぐ行く、と彼は返事をしたまま再び臉をふかぶかと閉じていた。軍靴の鉾が階段に触れる音が、けたるい四肢の節々に幽かに響いて来る、登音はそのまま遠ざかるらしかった。

暫くして彼は寝台に起き直り、ゆっくりした動作で身仕度を済ませ長靴をつけた。粗末な小屋なので動く度に床がきしみ、腕が触れる毎に壁はばさばさと鳴った。蝶番いの錆びかけた網扉を押し階段を降りると、おびただしい朝露である。ふり仰ぐと密林の枝さし交す梢のあわいに空はほのぼのと明けかかり、暁の星が一つ二つ白っぽく光を失い始めていた。梢から梢へ、姿を見せぬ小鳥たちが互いに啼き交しながら移動して行くらしく、また遠くで野生の鶏が

するどい声でつづげざまに啼いた。大気は爽快であつた。内地の月見草に似た色の小さい花が小径をはさんで咲き乱れ、歩いて行く彼の長靴の尖はそれらに触れてしたたか濡れた。

径は斜めにのぼり更に樹群は深くなる。そこが煤竹色の部隊長の小屋であつた。木と竹を簡単に組み合せ、屋根をニッパで葺いた単純な作りである。床は湿気を避けて人の背丈ほどもあるが、階段を踏むと自らぎしぎしと鳴った。開き扉を押し中に入ると、部屋の内はまだ暗かつた。窓の前に据えた竹製の机に脇をつき、隊長は椅子にかけたまま彼が入って来たのも気付かぬふうであつた。扉のおおりでゆらぐ蠟燭の光の中では、その顔は何時になく暗く沈んで見えた。机の上には空蕪莢を花瓶とし、黄色の花が二三本さしてある。書類綴りの耳を隊長の指が意味なく弄んでいた。彼はぼんやり部屋の中を見廻しながら、暫く床の上に佇んでいた。天井の暗みにひそむらしい虫が突然キキキと啼いたが、隊長は今まで椅子にもたせかけていた軍刀の柄を掌で膝の間に立てながら、しかし、彼にはやはり横顔を見せたまま、低い乾いた声で呟いた。

「宇治中尉か」

そして窓の方に顔をあげながら苦しそうに眼を閉じ、椅子の背に肩を落した。

「——実は今日、花田軍医のところと連絡に行つて貰いたいのだ。花田が何処にいるか、場所は判っているだろう

な」

彼の返事を待たず、椅子をぎいと軋ませ隊長は身体ごと彼の方に向きななれた。そして激しく口早に言った。

「射殺して来い。おれの命令だ」

朝の薄い光が窓から斜めに隊長の頭に落ちていたが、近頃めつきり白さの増した頭髮やまた形相の衰えが、蠟燭の火影の中で隈をつくり、かえって険悪な表情に見えた。そのまま隊長の視線はさすがのように彼をとらえて離さなかった。心の底でたじろぐものがあつて、彼は思わず足を引いた。長靴の裏に食い込んだ礫が堅い床木に摺れて厭なおとを立てた。掌で洋服をしきりにこすり、彼は全身の重心を片足の踵にかけていた。火影の乱れが彼の表情を不安定なものに見せたが、やがてうすぼんやりした笑いが彼の頬に突然浮んで消えた。そして両踵をつけ胸をやや反らし何か言おうとしたが、その前に隊長は眼をしばたきながら重く、むしろいたわるような口調で彼に言った。

「誰か、射撃のうまい下士官を一人連れて行け」

ふと顔を光から背けて視線を下方に落した。「花田は、射撃の達人だったな」

うつむいた隊長の髪の薄い顚頂を見守りながら、彼はふつと涙が流れそうな衝動を感じたが、それを押し切るように首をあげ、彼は確かな声音で一語一語復唱した。

「私は、花田中尉に会い、射殺します」

よろしいと言う代りに、隊長は彼の方を見ないまま右掌

をあげて僅か振った。敬礼をし、扉を押し、彼は一步一步階段を降りた。降りながらためらうように振り返ったが、扉のあたりから部屋の床に火影がちらと揺れただけで、彼の長靴は階段に軋みを残しながら既に濡れた地面を踏んでいた。

地面には梢の網目をのがれた光線が散乱しながら落ちていた。密林の彼方で、太陽がすでに登り始めたのであろう。樹々は新芽を立てながら同時に古びた葉を梢から散らしていた。雨季と乾季とより外、季節というものを知らぬこの風土では、植物の営みも自ずと無表情になるものらしかった。樹はおおむね闊葉樹である。径を曲るにつれて、遙か山の下手の方から幽かに歌声が聞えたり、また急に聞えなくなったりした。厚い落葉の層を踏みながら、彼は沈鬱に踵を定め、自分の小屋へ徑をたどった。歌は女声である。その単調な哀愁を帯びた旋律は、執拗に樹々の幹を縫い、位置によつては言葉尻まで判るほど明瞭に耳朶に響いて来るのだ。密林の持つ不思議な性格のひとつである。一つの歌声が先行すると、雑然たる合唱が乱れながらそれを追った。あれはイロカノ族の女達の榎搗きの歌声である。この山の麓から北方に拡がるサンホセの盆地から、米機の眼を盗み、兵達が搬送して来た榎をパンカに連ね、既に朝の榎搗きが始まったのであろう。両腕を組み、淡い光斑の散らばる小径を、黄色い花卉を蹴って歩きながら、彼はようやく自分が必要以上に靴先に力を入れ過ぎていることに

氣付きはじめていた。先刻ほんやり隊長の室を見廻したとき、ふと彼の注意を牽いたのは机の横の壁に巧みに竹で造られた勲章掛けであった。あれは隊長自らが造ったものか、当番兵の佐伯がこしらえたものか——隊長が身体ごと向き直ったとき壁が揺れ、裸火の光をはじいていくつかの勲章がきらきらと光ったのだ。

（あのうつむいた隊長のひよわそうな顚頂を見おろした時ふと涙が出そうになったが、あの時の気持は何だろう）突然にがい笑いが冷たく彼の頬にのぼって来た。

花田中尉が原隊を離脱してから既に一箇月近かった。

宇治の属する旅団は初め呂宋北端のアパリにいた。比島作戦に於ける米軍上陸必至の地点である。幾重にも陣地を構築して待っていたにも拘らず、レイテの戦況が一段落するや米軍は突如としてリンガエンに上陸を開始して来たのだ。リンガエンに於ける日本の守備は誠に微弱であった。米軍は文字通り枯葉を捲く勢でマニラに迫った。アパリ上陸の公算は既にこの頃から薄れ始めていたのである。持久戦を予想するとしても、アパリ地区は旅団全部を養うに足りない。アパリに孤立することは餓死を意味した。五月末旅団はついにアパリを見捨てた。カガヤン溪谷を南下して苦難に満ちた行軍を続け、北の入口からサンホセ盆地に入ろうとした時、リンガエン上陸の米軍の一支隊は疾風のような早さでカガヤン溪谷を逆に北上、旅団の最後尾に猛烈

な砲撃を加えて来たのである。

宇治の属する大隊は旅団の先達として、その前日すでに盆地に入っていた。最後尾の大隊が砲撃を受けたという報告が来た時、宇治はほとんど信ずることが出来なかった。北上する米軍を食い止める為に二箇大隊の将兵が急行し、カガヤン溪谷上流のオリオン峠に陣を張っている筈であった。北入口で米軍の砲撃を受けたということは、オリオン峠の二箇大隊が全滅したということに外ならない。宇治たちにも予想出来ない情況であったが、旅団後尾の将兵にとってもこの砲撃は全然予測の外であった。米軍の砲撃は極めて正確であった。情報の不備から、敵砲兵陣地の位置すら判らなかつた。ただ砲弾だけが正確に炸裂し人員を殺傷した。部隊は忽ちにして大混乱を起した。花田軍医中尉はその中にいた。

炸裂の破片は、花田中尉の当番兵を即死させ、余勢をかつて花田中尉の脚を傷つけたのだ。道路にあふれる死屍と傷兵を見捨てた花田中尉は住民の女の肩につかまり、東方に向け戦場を離脱し密林を抜け、インタアル付近の小部落に落ち延びたと言う。この事実を宇治達が知ったのはずっと後のことである。宇治たちの大隊は盆地を横断し、盆地の南入口付近の密林中に行囊を解き、仮小屋や鍾乳洞に分散、専らツゲガラオ飛行場に対する遊撃戦を待機していた。だから北入口で砲撃された後尾の情況は知らぬ。花田中尉は戦死したものだと思われていた。しかし北入口から逃

れて来た傷兵やインタアル付近に居る海軍部隊の報告を綜合すると、花田中尉の行動は自ら明かとなって来た。

脚部に負傷したとは言え軍医ともあろうものが、死傷者を見捨てて戦場を離脱したということは何であらう。その事實は秘されていたにも拘らず口から口へ拡がっているらしかった。北入口から離脱したとしても、当然彼は南入口付近に屯する遊撃大隊に合流すべきであったのだ。しかしサンホセ盆地の錯綜する道路網を、地理不案内のため方向を間違ふこともあり得る。またインタアル付近で脚の傷が悪化するということもあり得ないではない。しかしこの経過に先ず引つかかって来るのは、花田中尉に肩を貸したという住民の女のことであつた。

使いが出された。傷が未だ治癒せず歩行が困難であるからという理由で、花田中尉は還つて来なかつた。使者の報告では、密林中によりそうように建てられた五六軒のニッパ小屋部落のひとつに、花田中尉は女と同盟の記者と三人で暮していたと言う。あとの小屋には、戦場や部隊から離脱したり逃亡したりした陸海軍の兵隊が七八名、それぞれ分宿しているらしい。四五日経つて、再度使いが立つた。それでも花田中尉は還つて来なかつたのだ。

その中にだんだん食糧事情が悪くなり始めた。盆地の開闢地には穀は山と積まれていた。比島の農民は、穀を收穫期に一度に搗くことはせず必要だけその時々搗くので、白米としての保有はない。部隊としては穀を集めて、

これを米とする以外になかつた。しかしツゲガラオ飛行場から飛び立つ米機のため、昼間は穀の搬送は出来ぬ。夜間に辛うじて、密林内に引き込み、住民を集めて搗かせ、これを部隊の食糧にあてた。北口で後尾が襲撃された時、運悪く塩を搭載した牛車隊が全滅したので、宇治達は次第に塩分の不足に悩まされ始めて来たのである。それははつきりした症状ではなく、初めは何となく頭が霧をかけたようにぼんやりし、刺戟に対する反応が自分でも判るほど鈍くなる。可笑しいなと思つているうちに身体の部分がむくみ、急に立ち上ったりすると膝頭ががくがくした。こうなつて初めて塩分の不足ということが頭に來た。たまに一塊の塩を得ると、貴重なもののようにして舐めた。久し振りに舐める塩は、ふしぎなことには甘い味がした。塩とはこんな甘いものかと思つた。砂糖よりもっとあまかつた。舐めると次の一日間位は元氣が出た。

このような悪条件下でも、宇治の大隊はツゲガラオ飛行場に対する遊撃戦を放棄する訳には行かなかつたのだ。毎夜斬込隊が編成され、五号道路を越えツゲガラオ飛行場付近の幕舎や倉庫を襲つた。将校を長とする大きな編成の斬込隊や下士官を主とする奇襲隊が、一夜に幾組も密林を越えた。斬込みに赴いたまま帰らぬ者も多かつた。斬込行の途中で逃亡する兵がようやく多くなつた。十数名に足らぬ編成から七八名も逃亡することもあつた。密林に紛れて何処に逃げようというのか。斬込みに行くより逃げる方が、

死ぬ率が少ないに決まっていた。死を啗^うして斬込むとしても、斬込みそれ自身にどれほど効果のあるものか、それは疑問であった。厭戦^{えんせん}の気分が将兵のすべてにはつきりと兆し始めていた。逃亡兵は斬込隊だけではなく、部隊本部からも出た。宇治の部下も二三既に姿を消していた。

宇治は兵器係である。部下と共に、斬込みに使用する破甲爆雷などの製造に寧日^{ねいじ}なかった。製造所は鍾乳洞^{しゆりどう}の中であつた。鍾乳石の垂れ下る洞窟^{どうくつ}の中で、一日中火薬の臭いと共に暮した。時に同僚の昔の部下が、斬込みに行くため訣別^{けつべつ}のあいさつに來た。そんな時でも彼等はわらつていた。わらいながら手を振つて、洞窟を出て行つた。宇治は洞窟の出口まで見送りながら、あれが人間としての最後の虚栄であると思ひながら、それでも涙が出そうになるのを押えることが出来なかつた。そして出て行つた人々の半数は帰らなかつた。疲れ果てて夜飯小屋の寝台に横になるとき、宇治は帰つて來ぬ同僚や部下の数をひとりひとり心の中で読んでゐる。そして自分はまだ生きてゐる、と思う。それは感傷的な氣持ではなく、実感として胸に來た。そのような瞬間に必ず宇治は漠然と花田中尉のことを考へてゐるのだ。考へるといふはつきりしたものではなく、言わば意識の入口にぼんやり立つ花田の像を眺めていた。花田はこの旅団が久留米で編成されて以來の、数少ない彼の僚友のひとりであつた。――

南口のこの部隊はまだまだ良かった。北口の場合はもっ

とひどかつたのだ。北呂宋の穀倉と言われるこの盆地を確保することは持久戦を続けるために絶対必要なことである。此処を失えば全員山中に追い込まれて餓死の他はない。南口の戦況はさほど活潑ではなかつたが、米軍は北口からじりじりと侵入を續けていた。北口を扼する一箇大隊の將兵は、昼間は個々の蝟壺^{しゆり}に身をひそめ、身体をかがめて自らの口を充たすべき糧を搗き、夜に入れば初めて地上に出て戦つた。しかし精神力だけでは米軍に敵しきれなかつた。もはや米軍を圧倒することは夢であつた。ただ持久の態勢を持續し内地戦力の充実を待つ、これ以外になかつた。比島戦局に充てるため内地では航空機二千余機を東北地方に既に集結したと言ふ噂を、兵たちは半ば信じ半ばうたががつていた。このような状態になつても何故日本の航空機は飛ばないのか。リングエン上陸以來、空を飛ぶのは米機のみであつた。敵が「我が腹中に入る」のを待つて大挙日本の航空勢力が活動を開始するに違ひない。その目をむなしく待ちながらサンホセ北口では日々に死傷の数を重ねて行つた。軍医を送れ、という使いが北口から宇治の隊に何度も何度も來た。使者の兵ですら顔色は蒼黒く濁り、眼は憤るように血走つていた。これが戦場の顔であつた。そのまま持つて來た戦場の表情であつた。

南口を扼するこの隊にしても、見習軍医が一名とわずかの衛生兵がいるだけに過ぎない。食糧不調と風土病と斬込みの際の負傷者のため、それだけでは手が廻りかねる状態

である。しかも米軍が南口からの侵入を企図したならば更に多数の傷者が出ることは火を見るより明かなことであつた。侵入の気配を斬込隊により僅かに阻止しているとはいへ、それが何時までつづくか判らない。しかし北口の情況は使者の連絡を待つまでもなく焦眉の急を告げている。如何なる事情があろうとも花田中尉を呼び返し、北口に廻す外はない。最後の使者が選ばれた。高城衛生伍長が隊長の命を受け花田中尉のもとに急行した。そして昨夜遅く、高城伍長はむなしく戻つて来た。

自分は高級軍医である。高級軍医である自分を最も危険の多い北口地区に出そうと言うのは何か。南口にいる見習軍医か衛生下士官を派遣すべきではないか。自分はそのような不法な命令には応じない。

高城伍長は抑揚のない発声法で、花田中尉のそのような返答をはつきりと報告した。まだ若い、少年の稚なさを身体の何処かに残したような下士官である。その時宇治は偶然隊長室にいて、隊長と共にその報告を聞いた。斬込みに使う破甲爆雷やダイナマイトの原料が既に欠乏しかかつていて、その善後策について宇治は隊長室で話し込んでいたのである。彼は高城伍長の、若々しくせに變につめたい、あきらかに感情を殺した表情の動きにふと興味をうばわれていた。隊長が低い声で聞いた。

「お前が行つた時、花田軍医は何をしておつたか」

「小屋のすみにすわつて、パイヤバスの実を食べておられ

ました」

パイヤバスというのは、黄色い食用果実である。暗い密林の中のちいさな小屋で、柱にもたれてパイヤバスを食べている花田中尉の姿が、突然宇治の想像にありありと浮んで来た。その花田中尉の姿は、清潔な襦袢を着け顔は何か幸福そうに輝いているようであつた。

（あの窓から覗いて見たときの花田中尉の顔だ）

宇治は何故ともなく身ぶるいしながらその想像を断ち切つた。暫くして隊長は、苦しそうに呻くような声で訊ねた。

「――で、女は？」

「女は、一緒におりました」

裸火の蠟燭が揺れ、影が大きく壁にゆらいだ。そして暫く沈黙があつた。夜風が密林の上を渡って行くらしく、葉ずれの音が高まり、そして消えて行つた。宇治の心の底にかねてから漠然とわだかまるある想念が、この時初めてひとつのはっきりした形を取りはじめたのである。彼は頬をややこわばらせ、それでも何気ない風を装いながら、無意味な視線を隊長と高城伍長の上にかたみに移していた。

しつとり濡れた長靴の先に黄色い花卉を二三枚貼つけたまま、宇治は自分の仮小屋の階段を登つた。此処は林相の關係で糶搗きの歌声はほとんど聞えない。部屋に入る

と床を鳴らしながら彼は壁にかけた拳銃を手におろした。

黒色のずっしり持ち重りのするプロオニングである。寝台のへりに腰をかけ、彼は背を曲げて仔細に点検し始めた。点検し終るとひとつひとつ丁寧に弾丸をこめた。布片を出して銃身から銃把を何度も拭いた。うつむいたままその操作をくり返しながら彼は低い声を出してわらい始めた。ひどく苦しそうに笑い方であった。拳銃を持ち上げると笑いを止め、背を立てて右手を伸ばしねらいをつけた。彼の瞳と、照門と照星をつらぬく彼方に、窓の外に展がる密林の暗さがあった、太い幹や細い枝に蔓草がからみ、薄赤い小さな実が蔓のあちこちに点じている。拳銃をおろし安全装置をかけながら、彼は再び短いひからびた笑い声を立てた。そして床の上に痰をはいた。彼は昨夜の、花田の返答を高城から聞いたときの氣持を思い出していた。

あの花田中尉の言いつ分は身を賭してつづばなしたようなものであった。自身がたとい高級軍医であらうとも、命令が不当なものであらうとも、上官の命令を拒むことはどのような結果をもたらすものか、花田が知らぬわけがない。それがどのような具合に言われたのか昨夜の高城伍長の口裏では判らないが、しかしそれを聞いたときに宇治の背筋を、冷たい戦慄がするどく奔り抜けた。口腔の中が乾いて行くような不快な氣持がそれにまじっていた。宇治は思わず視線を隊長の顔に定めたが、火影を背にした隊長の顔はただ暗く澱んでいるばかりであった。ただ軍刀の柄頭を握った隊長の手が小刻みにふるえるのを宇治ははつきり見た

のだ。顔にあらわさないだけその怒りは、言いようのない激しいものとして宇治の胸をゆすった。そんなに怒ったってどうなるんだ、と宇治は反射的に考えたがこのやせた再役の老將校に対するあわれみの氣持がおこる前に、彼はこのような險惡な雰囲気とは全然無關係にさえ見えるあの花田中尉の営みが俄かに新鮮な誘いとして心を荒々しくこすって来るのを感じていたのだ。

寝台から立ち上り略刀帯をつけ、拳銃を右の腰に吊した。部屋の中中に立ち、彼はしばらく部屋中を見廻していた。壁はニッパの葉で造つてあるのだが古びてささくれ立っている。粗末な竹の寝台。鼠色によごれた毛布。この小屋でもう一箇月も暮したのだ。先刻はいた痰が腐った牡蠣のように床に付着している。彼はじつとその痰を眺めていた。何か荒廃した感じがふと宇治の嫌惡をそそったが、彼は背を揺り上げるとそのまま扉を身体で押し、階段を一氣にかけ降りていた。

山の斜面に、丁度腰かけたように見える細長い建物の入口を宇治は入って行つた。この部隊の医務室である。中に入ると中央に置いた卓の上で衛生兵が二三人、キニイネ剤かなにか白い粉末を調合していたが、その中の一人が顔をあげて不審そうにちらと彼を眺めただけで、また仕事をつづけた。窓がひろく取つてあるので割りに明るかったが、竹のすだれで区切る奥の方は薄暗く、そこに床をつらねて病傷兵が寝ているらしい。鋭い消毒薬の臭いに混り、青臭

い病臭がほのかに漂っていた。窓の外からは高く低く窺搗き歌が流れて来る。右手の小入口の外側で突然、

「道に迷ったって。嘘をつくな。逃げようと思ったんだろ」

何か固いものが肉体にバシバシと当る音がした。

「いえ、伍長殿。ほんとに迷ったのであります」それから声が低くなり何かくどくど言う声音であったが、声が途断れると又急に殴るらしい気配がした。

「——いいか。それは判つとる。目下の状況では配置を一旦離れたら、逃亡と見なされても仕方がない。判ったか。判つたらかえれ」

抑えた喝喝がそれに続いて聞えた。衛生兵等は感動の無い様子で黙々と仕事をつづけている。彼は刀を床に立て眼を閉じ、じつとそれを聞いている。暫くして右手の小入口から扉を押し、高城伍長がのっそりと部屋にあがつて来た。顔が少し紅潮している。宇治の姿を見て立ち止まったが、若々しい声で、

「見習軍医殿はおいでになりません」

宇治は身振りで、ついて来いと合図をし、黙って刀を提げたまま外に出た。

密林の中は自然に踏み固められた道がついていて、それを斜めに下ると地面は次第に湿気を帯びて来る。斜面の腹には巨大な石が幾つも根を据えていて、径は危くその間を縫い、そこらあたりから密林がやや薄くなって来る。サ

ンホセの盆地はこの山を降りきったところから北方に拡がっているのだが、梢の切れ目に隠顕する湿地帯の彼方を、パンカを水牛に牽かせて三四人の男達がそれに乗りゆるゆると動いて行くのが見える。遠いから、それが兵隊か比島

の農夫か判らない。サンホセ盆地の中央部に通ずる運河の水が、遠く一筋に鈍く光った。彼は歩を止め石を背にして振り返った。高城の顔に視線をおとしながら言った。

「今から直ぐ、花田軍医の処に行く。お前も来い」少し間を置いて「部隊長の命令で、花田は銃殺ときまった。但しこれは、誰にも言うな」

緊張の色が一寸高城の顔をかすめただけで、あとは普通の表情であった。白い歯を見せて笑ったようであった。

「はい。誰にも言いません」

「すぐ用意をととのえて、俺の小屋に来い」

敬礼して立ち去ろうとする高城の後姿に、宇治は追っかけて呼んだ。

「——拳銃を持って来い。そして身の廻りの大事なものも持って行け」

高城の不審そうな視線が彼の顔にかえって来た。宇治は眼を外らしながら掌を振った。そして足を引きずるような歩き方で高城と反対の方に歩き出した。

頭の上を突然サワサワという幽かな音が通った。宇治が眼を空に向けると、梢の切れたところを渡る幾百羽とも知れぬ候鳥の群であった。一群が過ぎるとまた一群がつづい

た。チチと鳴く声も聞える。それらは次々に盆地を越えて行くらしい。あの方向がインタアルである。盆地を横切って行けば近いがそれは危険だから、やはり密林の道を迂回する外はない。彼は首を振りながら顔をしかめて痰を飛ばした。それは薄赤い点となって崖の下に落ちて行った。先刻仮小屋の床に見た痰の色がまざまざと宇治の脳裏にふとよみがえって来たのである。

それにははっきりと赤い血の色がまじっていたのだ。アパリに居る時も、夕刻になるとひどく疲れたり肩が凝ったりがけぬ略血をした。勿論状況が状況であつたから安静などとは思ひもよらず、強行してサンホセに入つたのだが、それから一箇月の日光から遮断された密林の生活で、彼は自分の身体が刻々とむしばまれて行くのをはっきりと自覚していた。医務室にもろくな薬がないのが判っていたし、診察を受けても意味のないことは明かであつたから、宇治は誰にも言わず今まですごして来たのだ。彼は今年三十三歳になる。三十歳を越せば病状の進行もゆるやかであるということは彼も知っていたが、それも平和な市民の生活をしている場合のことであつた。遠からず砲弾か銃剣で死ぬことが予想出来るのに、何を病状を苦にすることがあろうと、時に冷たく笑いがこみ上げて来ることもあつたが、ふしぎなことには痰の中の血のいろを見ると彼は生きたいという欲望が猛然と胸の中に湧き起って来るのが常であつ

た。

——自然に踏みならされた石階を降りると、洞窟の入口であつた。乾いた風が洞の奥から絶えず吹いて来て、彼は目を細めながら入って行った。入口の近くが自然の広間になつていて、彼の部下たちがもはや仕事にかかつていた。彼の姿を見ると皆立ち上つて挙手の敬礼をした。黒い粉末を容器に詰める仕事をしていた松尾軍曹が、歯をのぞかせて笑いかけながら言つた。

「中尉殿。今日は顔色がすぐれませんか」

彼はあいさつを皆にかえしながら、突然激しい羞恥の念が胸いっぱいひろがった。それは押えようがなかった。入口に入る時心がまえが出来ていたつもりにも拘らず、日頃見なれた部下の兵隊の顔を目前にした時、覚えぬ血が頬にのぼつて、彼は暗がり顔に顔を背けながら不機嫌な声で言つた。

「おれは今日命令で出張する。あとのことは松尾軍曹がやれ」そして低い声でつけくわえた。「帰りは——帰りは何時になるかわからん」

語尾が少しふるえた。皆しんと黙つた。その沈黙は何か不自然なものに宇治には思えた。身体を少しずつ動かして彼は洞窟の中を見廻した。白く光る鍾乳石の間に道具がいくつも並んでいて、兵たちの青白い視線が一せいに彼を刺して来るようであつた。彼はたじろぎながらそのまま歩を返そうとした。背後から松尾軍曹の声がした。何を言つた

のか判らないが、彼は立ち戻らずに出口の方にあるいた。外には朝の光があふれていた。石階をのぼる時初めて冷たい汗が宇治の背筋を流れ出して来た。

○八三〇高城伍長は彼の仮小屋に来了。その少し前に隊長当番兵の佐伯が来て、しっかりとやるようにとの隊長の伝言と贈物の水筒をもたらしした。水筒をあけるとウィスキイの香がした。そして佐伯はずるそうに笑いながら、物入れから鶏卵を二箇出して、これを中尉殿に上げます、と言った。

「これも隊長からか？」

「いえ、これは私からです」

佐伯が戻って行くのと入れちがいに高城がやって来た。拳銃一挺さげただけの軽装である。高城の拳銃を何か不思議なものでも見る目付で眺めながら、彼は自分も略刀帯に軍刀を吊り拳銃を下げ、その上から水筒をつるした。そして長靴を軍靴に履き換えた。網扉を押すとき、彼は部屋の様子を記憶に刻み込むようにも一度しげしげと振り返った。脱ぎ捨てられた長靴は、ひとつは立ちひとつは床にたおれていた。目をしばたきながら彼はぎしぎしと階段を降りた。出発、と彼は低く言い、そして歩き出した。高城の登音がそれにつづいた。

密林の各所に日本軍が入ってから、連絡の必要もあって大体道らしいものは出来ていたが、それも定かなものでは

ない。植物の旺盛な繁殖がすぐ道をかくしてしまふ。群れ立つ樹々の梢が日光の直射をさえぎっていたが、それでもむんむんする草いきで、暫く歩くと汗が背筋に滲み出して来た。道は東北の方角である。歩くにつれて湿度が高く、羽虫のようなのが道のあちこちを飛んでいて、それが顔にぶつかったりしてうるさくてかなわない。歩きながら彼は花田中尉の状況を聴いた。

花田中尉はインタールに落ち延びる時、水牛にでも積んで行ったのか薬品を沢山もっていて、今はその薬品を原住民の食糧と換えそれで食いつないでいるらしい。戦場から身をもって逃れたというような想像を彼は今までしていたのだが、そのような才覚なしでは密林中に一箇月も独立して生きて行くことは困難な筈でもあった。昨日高城が花田と会ったのは、両側から草山の斜面が切れこんだ溪あいたにの小さな部落で、その小屋にはもはや同盟の記者はいない。食糧と塩を求めて東海岸方面に出発したという。東海岸はインタールから一本道である。そこは未だ戦災が及んでいないのである。

「柱によりかかって脚には毛布をかけて居られましたから、負傷の具合は判りません」

「召還に応じないと言ったんだな。どんな口調で言った？」

「——あたり前の調子でした」

「部屋には彼一人がいたのか」